

母校か、それとも本務校か。昨年5月にこの選択肢がふと頭に浮かび、迷わず本務校を選びました。そうして、本年度より、例会会場を慶應義塾大学三田キャンパスから跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

牛後か、それとも鶏口か。同じ選択肢をこのように言い換えてもよいでしょう。慶応にはたくさんフランス語教員がいますが、逆に、跡見ではフランス語の専任教員は私一人で、おまけに着任前に知り合いだった人が文字どおり一人もいなかったおかげで、誰の顔色も気にせずのびのびと仕事をしています。「修行中は牛後、修行を終えたら鶏口(あるいは、鶏口になったことをもって始めて修行が終わる)」という信条をもつ私にとって、フランス語学会運営主担当3年目となる今年、鶏口を目指すべきであることは明らかでした。そうして、本年度より、例会会場を慶應義塾大学三田キャンパスから跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

牛後か、それとも鶏口か。実のところ、この問いは、私個人の信条を超え、例会発表者や参加者にもかかわる問いのように思われました。というのは、牛後ゆえの行き違いにより、例会当日に大学の門が閉まっていたり、機材が使えなかったりすることが何度かあったからです。(2010年のニューズレター第18号に記したとおり) 運営の仕事が大変だと思ったことは一度もありませんが、教室予約と非常勤と例会で一週間全部三田に足を運んだり、教室予約と夜間の非常勤で一日に二度三田に足を運んだりするわりには、発表者や参加者にご迷惑をおかけすることが多く、非効率的であると感じていました。それならば、事務職員も警備員もみな私の顔を知っている大学に会場を移した方が安心なのではないか。昨年5月にこの考えがふと頭に浮かび、直後に三田が節電で使えなくなったのに乗じて、7月の談話会と9月の例会を跡見の「試運転」に利用しました。

母校か、それとも本務校か。実のところ、この問いは、実際上の必要を超え、たいへん贅沢な問いのように思われました。というのは、母校と本務校がどちらも東京の真ん中にあるというのは、(3.11以降、東京の不安要素が増したとは言え) 希有な幸運だからです。いや、それ以前に、そもそも本務校をもっていること自体が希有な幸運というか奇跡です。母校は誰にでもあるものですが、本務校は(少なくともある世代以降の人文系の研究者にとっては) ないのがふつうで、公募に応募するというのは、(当たり前外れにまったく根拠がないとは言わないまでも) ほとんど宝くじを買うようなものでしょう。それならば、奇跡的に当たった宝くじは、他の研究者に末永く還元すべきではないか。着任一ヶ月後の昨年5月にこの考えがふと頭に浮かび、迷わず例会会場を跡見学園女子大学文京キャンパスに移すことにしました。

奇跡的なくじ運に恵まれたおかげで、今までフランス語学会と無縁だった大学を例会会場として開拓することができ、ちょっと誇らしい気がしています。そのせいかわかりませんが、今年は例会予定に若い研究者のお名前がずらりと並び、ついに新しい時代の幕開けかとわくわくしています。狭苦しいキャンパスですが(そのため教員の研究室はすべて新座キャンパスにあります)、研究を深める場として存分に活用していただければ幸いです。みなさんと茗荷谷でお目にかかれるのを楽しみにしています。